

Neues in Nara

Nr.90

2024(令和 6)年 11 月 24 日

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara (JDG-Nara)

奈良日独協会(会長 河野良文)奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

Tel/0742-61-6312, Fax/0742-61-0473

<https://www.daianji.or.jp/jdgn/>

編集: 浅川千尋 (asakawa@mild.ocn.ne.jp)

● 行事報告

第 30 回シュタムティッシュ特別企画

湯川史郎先生講演会: 「F. M. トラウツが遺した日本の姿 - 奈良の写真を中心に -」



湯川先生の講演

9 月 22 日(日)、第 30 回シュタムティッシュの特別企画として「フリードリッヒ・マックス・トラウツが遺した日本の姿 - 奈良の写真を中心に -」というテーマで講演会を開催しました。講師はボン大学専任講師の湯川史郎先生。大雨にもかかわらず神戸日独協会や大阪、京都からおいで下さった方々、学生さんなど会員以外の参加者も多く、25 名が大安寺獅子吼殿に集ま

り、湯川先生の興味深いお話を傾聴しました。トラウツ博士(1877~1952)は、高野山根本大塔を始めとする仏塔の研究仲間として河野清晃・大安寺前貫主と親交を結び、奈良日独協会創設の端緒を開いた日本学研究者です。日独の文化交流を目指したトラウツ博士が日本滞在時に撮影した写真—とくに奈良や高野山の写真もたくさん見せて頂きました。昔の日本の風景や文化、人々の様子が記録された膨大な資料が残されているのは素晴らしいことですし、それらを撮影、蒐集したトラウツ博士の日本や日本人々への愛が感じられありがたく感じました。またメディア学がご専門の湯川先生ならではの、時代の流れと写真の撮り方、分類の話も面白く、撮影場所を特定するのが困難という奈良の写真に参加者からは「これは〇〇池だ」「あれは〇〇神社だ」と声が上がっていました。(シュタムティッシュ担当理事: 水野恵理子)



集合写真

第 12 回ドイツ料理教室 実施報告

奈良日独協会ドイツ料理教室を、10月20日(日)に奈良市生涯学習センターにおいて開催いたしました。講師の土井ギーゼラ会員、及び土井通靖会員のご指導のもと9名が受講しました。今回は、チロル地方のほうれん草団子(Tiroler Spinatknödel)及びトマトのラグー(Tomatenragout)をメイン料理として、他にリンゴの焼き菓子とサラダを学びました。先生方の、作業の様子や言葉による説明は、大変重要であることを、作る過程で随所に感じました。



試食時には、美味しい感想を話し合いながら楽しくいただきました。写真は、調理中の一コマです。参加いただきました皆さま、ありがとうございました。次回は12月15日(日)に実施の予定です。

(料理教室担当:理事:松本俊郎)

第 13 回大安寺国際縁日

11 月 3 日(日)、素晴らしい秋晴れの中、恒例の国際縁日が大安寺で開催されました。お店(ドイツパン・エアダール、ワインの王子様の他、奈良女子大、奈良大、永井学園等の留学生らによる各国料理の屋台)での販売や、アゴラ音楽クラブの和太鼓演奏、留学生たちのパフォーマンス、



美しい韓国民族舞踊など国際縁日の名にふさわしい多彩な出し物で賑わいました。

●今後の主な行事予定

- 12月8日(日)クリスマス会 「ダイニング菜宴(さいえん)」 17時半から(17時から受付開始)20時まで
- 第13回ドイツ料理教室 12月15日(日)
- 2025年1月 関西地区合同新年会(予定)
- 2月第7回ドイツ映画観賞会及び第31回シュタムティッシュ(予定)

追悼： 図書館の乾聰一郎氏を偲んで

今年7月、奈良県立図書館の乾聰一郎氏が逝去されました。

長年、当協会の多くの行事に関わっていただいたのでご存知の方も多くいらっしゃると思います。謹んで報告致します。

写真は、ドイツ総領事館の招待行事「ドイツ統一記念日パーティー」での乾氏です(2012年10月、帝国ホテル大阪、筆者撮影)。



同館は奈良県の新しい情報発信拠点として 2005 年に開館しました。乾氏は、開設準備段階からソフト面を担当され、従来の「本を借りる場所」という概念を覆す様々な企画を展開され、地元企業や行政機関、団体、外国機関等との積極的な連携により、ユニークな企画展示やイベントなど、これまでにない情報発信を展開されてこられました。

ドイツの文化情報発信にも高い関心を持たれ、開館当初よりゲーテインスティトゥート京都(現ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川)などの機関と連携し「世界のブックデ展」を継続して開催されています。展示作品はドイツ・ライプツィヒでのブックフェアで発表される「世界で最も美しい本」コンクールの受賞作品や、日本をはじめカナダ、中国、韓国で開催されたコンクールの受賞作品が展示されています。

当会との連携行事として、ドイツ大使館より提供されたポスターの「パネル展」を共催で同館のエントランスホールで開催しました。

展示テーマは、環境(2009 年)、ドイツ再統一(2010 年)、エネルギー政策(2012 年)、独裁と民主主義(2014 年)、マルティン・ルター(2017 年)、アインシュタイン(2023 年)などでした。更に、日独交流 150 周年記念菩提樹植樹式(2011 年)、ドイツからの合唱団を招いたコンサート(アルス・ムジカ合唱団 2013 年、ベルリン・カニジウム高楽団 2013 年)、講演会(2012 年)、「奈良日独協会の歩み」写真パネル展(2011 年)など当会の主催行事も同館で多数開催しました。同館でのすべての行事開催にあたり乾氏より多大な協力を頂き、一般市民の皆様への当会の知名度アップに大いに貢献いただきました。乾氏に改めて御礼を申し上げご冥福をお祈り致します。(顧問:林保之)

寄稿： 奥能登びいき、珠洲びいき

3歳から金沢の新興団地で育ちましたが、その前は奥能登・珠洲の父の実家に身を寄せていました。揚げ浜塩田が受け継がれ、「平家にあらずんば人にあらず」で知られる平時忠が配流された大谷という地区です。物心つく前のことで当時の記憶はありませんが、体が覚えていま

す。よちよち歩きの私は母親の後を追って転び、囲炉裏へ転落。手に大やけどを負いました。幼児の手は柔らかく、握ったこぶしが熱で溶け、くっついてしまいました。「すぐ飯田の医者連れてかんか!!!」祖父の怒号を合図に、父は4里(16km)離れた病院まで私をおぶって走ってくれました。左手中指の関節の曲がり、水掻きのようにくっついた指の根元。この左手、この中指が、大谷を記憶してくれています。

その父は家庭を顧みないダメ親父でした。生活費もろくに入らず、高価なものばかりツケで買ってきます。盆正月に加え、春は山菜取り、秋はキリコ祭。給料日になると自宅に帰ってこないことがよくありました。母が大谷の実家に電話すると、案の定、電話の向こうから「おっさま(能登弁で弟の意。父は次男)なら来とるよ」と聞こえます。夫婦喧嘩も絶えず、母を泣かせる父が大嫌いでした。それでも小学生の頃、そんな父に連れられて今は廃線になった国鉄を利用してでかけたり、高校入学前の春休みには独りでママチャリを漕いで里帰りしたりしました。

成人後、珠洲は葬儀にでかける場になりました。父は7人兄弟姉妹。叔父や叔母の訃報が入るたびに慌てて喪服を整え車を飛ばすのです。親族が集まると、話題は自然と血縁関係に及びます。私は家系図を作り始めました。その後、戸籍謄本、法名と没年月日が記された掛け軸、祖父の遺品から出てきた江戸末期の検地の記録、菩提寺の住職が見せて下さった過去帳も加わり、ファミリー・ヒストリーがおぼろげながら見えてくると、珠洲の山中でいのちを繋いできた祖先がそばに降りて来てくれたように感じられ、自分の中で愛おしさが灯り始めました。

元日の夕方、最大震度7の巨大地震が奥能登を襲いました。珠洲市は6強。独りで家を守ってきた83歳の叔母は自衛隊員に助けられ避難所の大谷小中学校に入ることができましたが、ライフラインが途絶えた孤立地域だったため当初は安否確認もできず、余震が続く冷え冷えとした体育館では400人以上の住民が肩を寄せ合っていました。津波、海岸隆起、潰れた家、ひっくり返った車、折れた電柱、地割れ、山の崩落で寸断された道路…。ふるさとの変わり果てた姿を見るたびに涙が湧きました。

2月半ば、大阪在住の報道カメラマンが出身地・大谷に入って取材した動画を見て「この人とつながりたい!」と思いメールを送ったところ、すぐに返事が届き、関西珠洲会を勧められ、

迷わず入会しました。珠洲市および能登町(旧珠洲郡内浦町)にルーツがある関西在住者で作る団体(平成25年設立, 会員約130人)です。

9月の奥能登豪雨は、灯りかけた復興の希望を再び奪う無情な仕打ちでした。珠洲では大谷地区の被害が最も甚大でした。山が崩れ、大量の土砂が、家と道路と人間を文字どおり飲み込みました。半年も続いた断水がやっと解消されたばかりで再び断水生活に逆戻り。9月末に完成予定だった仮設住宅も、浄化槽が泥水に浸かったため入居が2か月先延ばしになりました。豪雨の翌々日、関西珠洲会の会長さんがグループ LINE で「なんばで街頭募金活動をやいませんか」と呼びかけると、「一丁やりましょうよ!」、「横断幕用意します」、「募金箱作ります」など、次々に書き込まれました。ふるさとを想う熱量、発想力、行動力、そのすがすがしい心意気。私も首から下げるパネルを作って生まれて初めて募金をお願いする側に立って参加しました。

これと並行して、3年前に知り合ったシンガーソングライター・沢知恵

さんを奥能登につなぐお手伝いもさせていただきました。沢さんはピアノの弾き語り。通常の音楽活動をベースに、ハンセン病療養所、少年院、児童養護施設、東日本大震災被災地に出向いて歌を届けている社会派シンガーです。その歌はやさしく、強く、しなやか。5月末、彼女の活動を



支援する「ともえ基金」の会報に「能登半島地震で私のコンサートを受け入れて下さりそうな方や場をご存知の方はお知らせ下さい」とありました。学校ならピアノはあるはず。思い切って手を挙げたところ、沢さんが気に入って下さり、事前訪問を経て、11月初めに輪島のかわい保育園と珠洲の三崎中学校でコンサートが実現しました(QRコードからご覧いただけます)。

私もそのコンサートに立ち会ってきました。地震の爪痕が残る宿に泊まった翌朝、洗面所で歯を磨いていたら、聞き覚えのあるメロディに思わず声を上げました。大好きなヴェルナー(Heinrich Werner)の「野ばら」です。市が毎朝7時に流している防災行政無線チャイムでした。半島の先端で見つけた小さなドイツに嬉しくなりました。

かつて珠洲には2地区(高屋と三崎)で原発誘致活動が展開されました。住民は賛成派と反対派に分かれて対立しましたが、2003年、28年の闘争の末に大手電力会社が建設計画を凍

結した歴史があります。今回の大地震を思えば原発が建設されなくて本当に良かったと思いますが、化石燃料に依存し続ける限り気候危機は深刻化し、豪雨は今後もたびたび発生するでしょう。

祖父や父、叔父・叔母、いとこたちが通った大谷小中学校の「学校だより」には、先生がたが詠んだ俳句が紹介されています。何年前だったか覚えていませんが、社会批判とユーモアが絶妙に混じった傑作があります。「燃やすなら 地下資源より 皮下脂肪」。震災と豪雨によりかけがえのない命、建物、文化が失われた半面、新たな出会いも私は手にしました。復興の道のりは長く険しいものとなりますが、人口減少・高齢化・自然災害は何も奥能登だけの問題ではありません。30 年後の未来を思い描きながら、珠洲の魅力を海外に発信していく活動を通してふるさとに息長く関わっていきたいと考えているところです。



令和 6 年 10 月 12 日 大阪なんば高島屋前の広場にて。関西珠洲会撮影。

追記：

河野会長から許可を頂けたので、12 月 8 日のクリスマス会では、奥能登(輪島市、能登町、珠洲市)に届ける義援金の募金箱を用意致します。皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。
(理事：中祢 勝美 / なかね・かつみ)

会員異動

11 月理事会において、福田曠子会員、菅野紘会員、民谷浩一法人会員の退会を了承しました。

豊住征子理事、福島重博会員が逝去されました。

編集後記

Neues in Mara Nr. 90（会報 90 号）という節目で充実した内容になった感じがしております。今回も理事の皆様の助力を得てなんとか発行できましたことを喜ばたいと思います。なお、SNS でも奈良日独協会等の情報を発信しております。

Facebook は、奈良日独協会(Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara)

Instagram は narajapanischdeutsch です（浅川）。